

教育経済建設常任委員会行政視察報告書

黒川 貫 男

○山形県南陽市

シェルターなんようホール（南陽市文化会館）について

【所 見】

南陽市文化会館の正面玄関入口から館内に入ると木材の香りが広がり、さすが「木の音楽空間」をコンセプトに建設されたすばらしい会館で、「世界最大の木造コンサートホール」は、木造では1,403席という席数が記録的な数値であり、また、最大スパン28メートルのホールは最先端の木造技術の集結により、ギネス世界記録に認定されているとのことである。

また、木の優しさに包まれたホールは文化・芸術の彩る視覚だけではなく、嗅覚からも木のぬくもりが感じられ、木の香りにはフィトンチッドという成分が含まれており、消臭・脱臭効果によりリフレッシュ効果も生まれるとのことであった。

このホールに使われた木材は地元企業が開発をした木質耐火部材によって耐震性や耐火性が保証されており、いろいろな観点からも地元の企業による技術と製品があったことから成し遂げられたすばらしいホールであった。

しかし、この文化会館の建設に当たり、当初は35億円から40億の予算で事業がスタートしたとのことであったが、最終的には約66億8,000万円がかかったとのことであった。その理由として考えられるのは、最初の計画の時点で、補助金確保のため農林水産省を訪問した際、省の職員から紹介された人物の助言により専門家委員会を設置するに至ったが、その委員会のメンバーが非常に高名な方々であり、音楽家・坂本龍一氏をはじめ、尾崎豊を育てたプロデューサー・福田信氏、(株)キョードー東京の社長である山崎芳人氏などの国内の名立たる人材がそれぞれの専門的意識を出し合い「山形で一番使いやすい、全国ツアーの興業ができるホール」を目指したことにあるのではないか。実際に施設を視察し、ホールの内装や開口、つり物機構を含む舞台の形状は専門家委員会の意見に沿った本当にすばらしいものであった。少々気になったことは人口3万1,000人の南陽市では、1,403席の必要性があるのかということである。

○山形県米沢市

P F I 制度による市営住宅建替等事業について

【所 見】

米沢市が手がけたP F I 制度による市営住宅の建てかえ事業を視察した。事業の経緯の説明を聞いたところ、私個人の感想では、市営住宅のP F I 制度による事業選択は非常に難しいものがあると感じた。事業者の選定条件の中に「民間事業者の条件」という項目があり、入札参加者は「設計企業」「建設企業」「維持管理企業」で構成されるものでなければならないということがある、その形態は「単独企業」あるいは「複数の企業」で構成されることも可能であり、また、業務の一部を第三者の協力企業に再委託も可能とされていた。さらに、建設に当たる企業は米沢市競争入札参加者登録名簿による建築一式のAの等級に格付されている者とされており、どの部分を、どの企業がどのような形で事業展開をしていくのか、非常に不安を感じた次第である。現に、平成21年から1号棟を初めとして3号棟までP F I 事業で取り組んで事業展開をしているとのことであるが、最初の1号棟の競争入札時には入札参加表明者が3グループあり、実際に入札参加したのは1グループであり、2号棟、3号棟とも入札表明、入札参加が前回と同じグループ企業1社で、事業運営をしているとのことである。

P F I 事業は民間企業の特異性を生かし、企業の努力により活況になることを目的としており、たとえ公共施設でも収益性のある事業として取り組まなければ民間企業の参入意欲は求められないのではないかと感じた。

今後、本市としてもこのようなP F I 事業をしっかりと研究しなければならないが、事業に参入する企業の意とするところや企業力の社会性を加味し、公共施設のあり方や市民サービス向上を考えていかなければならないと痛感した。